未来をひらけ！若者会議

～若い世代のまちづくり～　大阪府富田林市

平成27年６月の公職選挙法等の改正により、18歳から選挙権が与えられ、令和４年４月からは成人年齢も18歳に引き下げられた。教育現場でも、社会の課題に関心をもつためのカリキュラムが組まれるようになっている。こうした中、「若者会議」や「子ども議会」などを開催し、地域と若者の関わりを深めようと取り組む自治体も出てきた。令和２年に若者の力を生かしたまちづくりを目指して「若者条例」を制定し、「若者会議」を設置して事業を展開している富田林市もそのフロントランナーの一つである。

ウォールアート（テーマ：Over the moon　縁あるまち」。
製作者：Titifreak（チチフリーク）

未来をひらけ！若者会議

～若い世代のまちづくり～

富田林市 人口 107,342人、世帯数 52,545戸（令和５年12月31日現在）大阪府の東南部に位置し、雄大な葛城・金剛山を見はるかす緑豊かな丘陵と美しい田園風景が広がる地域である。戦国期に形成された「富田林寺内町」から発展した歴史をもち、市東部は「大阪なす」などの促成栽培をはじめとした農業が盛ん。昭和40年代から住宅開発が進められ、大阪中心部で働く人々のベッドタウンとなり、市内や周辺地域には大学や高校も多く立地する学園都市としての一面も有している。

◉ 若者が市政参加できるシステムづくり

令和４年11月３日、富田林市は金剛東中央公園で「富田林ミューラルプロジェクト」のイベントを実施、市の新たなシンボルともなる大型ミューラル（壁画）をお披露目した。参加者が自由にペイントできる「参加型ライブペイント」も併催し、多くの市民で賑わった。ミューラルの制作は「富田林市若者会議」が、コロナ禍にあって地域の人々を笑顔にする新スポットをつくろうと提案、市が制作会社に依頼して世界的なアーティストの手で実現させたものである。

さかのぼること53年前の昭和45年11月３日、富田林市は市民憲章に「若い力をのばし、希望と平和の未来を築きましょう」と謳った。以来、市は若者の活躍がまちづくりに必要不可欠なものとして、昭和46年に「青少年センター」を設置、若者たちが気軽に集える場所を提供した。それが現在の「富田林市きらめき創造館」（愛称：Topic（トピック））となり、青少年をはじめ市民の自主的な活動を支援する場となっている。

若者支援の素地が醸成されていく中、令和元年５月、「若者が活躍するまちづくり」を選挙公約に掲げた吉村善美氏が市長に就任、市は「若者条例」の制定に動いた。総合基本計画策定のための市民参加型の「市民会議」に若者世代の参加を呼びかけたところ、幅広い世代に受け入れられ、令和２年12月21日、「富田林市若者条例」の制定に至った（令和３年４月１日施行）。

全８条から成る条例には、若者は、主体的にまちづくりに参画するとともに、市民等及び市が実施する取り組みに積極的に協力するよう努めること、市は若者に対して市政等に関する情報を提供するとともに、必要に応じて施策の策定又は財政上の措置を講ずること、そして若者が市政等に参画する機会として「富田林市若者会議」の設置を規定した。

富田林市きらめき創造館（愛称：Topic） 老朽化した「青少年センター」を改築し、平成29年９月オープン。「話題にあふれた活気ある場所」になるよう、市内在住・在学の若者たちにより、「Topic」という愛称がつけられた。

若者の意見を市政に反映させるための回路づくりは、自治体により様々に取り組まれているが、富田林市は若者会議を市の附属機関に位置づけている。予算の使い道を若者自らが立案する予算提案権をもたせて市が財政上の措置を講じるというもので、若者会議を既存の行政システムに接続・実装させたことで、全国的にも注目を集めた。

若者会議の募集には、定員20人（概ね16～30歳）に対して48人が応募、最終的に25人に委員を委嘱し、第１期若者会議が発足した。会議の

1

運営は市生涯学習課が担ったが、テーマごとにファシリテーターの役割として入庁2年目以降の若手職員を配し、必要な情報の提供など若者たちの合意形成を支援する体制を整えた。

◉会議実施の流れと課題

若者会議は、5月の事前研修会に始まり、途中の中間報告（7月）を入れて6回の全体会議を経たのち、9月に施策提案を行う。実質5か月の活動である。「1回の会議は基本3時間でしたが、時間が足りませんでした」と話すのは第1期委員の河野隆太さん。そのため、会議以外に集まって打ち合わせをすることも多かったという。また、第1期と第2期の委員であった渋川千栄子さんは、「第2期は、早い段階でテーマに関連する担当部署の方が参加し、具体的な情報が入ってきたことでまとめるのが大変でしたが、いい経験になりました」と話す。

こうした経緯について、若者会議の準備段階からの担当者・市生涯学習課社会教育事業係副主任の井関貴央さんが説明してくれた。「予算要望の時期から逆算して日程を組んでいるので、時間が足りず委員のみんなにはご苦労をかけています。第1期では、事業が決定しても担当部署に回せず、ほとんどを生涯学習課が取り仕切るという事態になったため、第2期では中間報告の前の段階で担当部署の職員に参加してもらいました。ただ、若者会議の意見が固まらないうちに参加すると事業費などの制約的な情報が入ることで、当初の構想より小さくまとまってしまった提案もありました」。そこで、第3期では担当部署の参加を中間報告以後に移し、それまでは若者だけで提案を煮詰める形をとった。

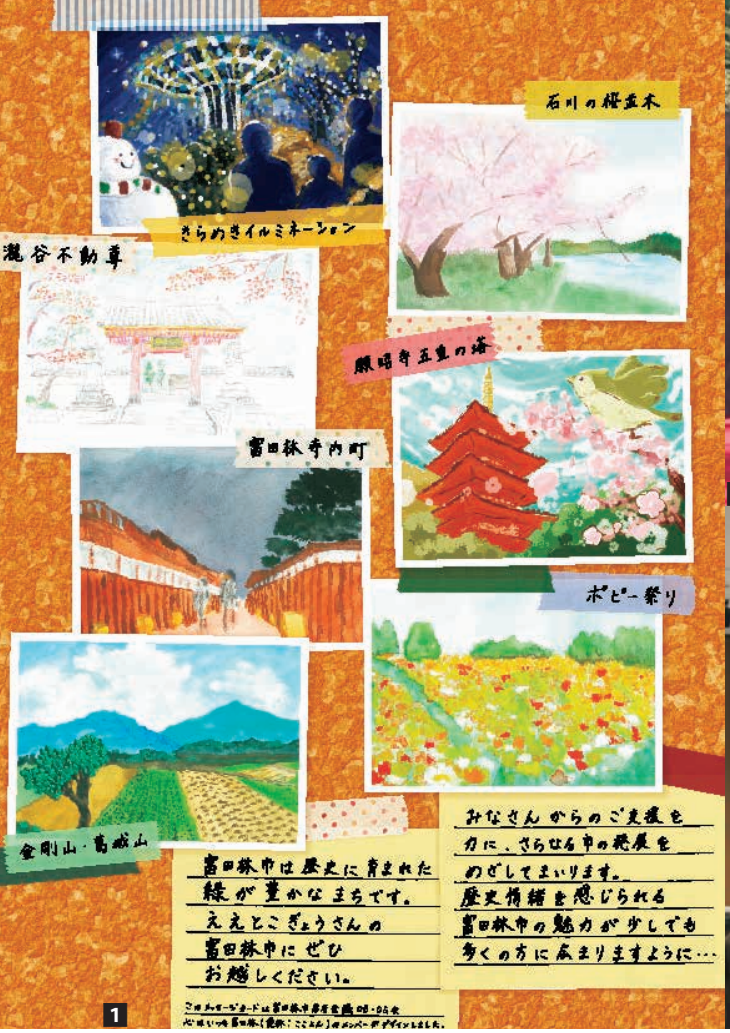
一方で若者たちの真摯な議論と活動を認知する市職員も増え、第2期からは活動がしやすくなっていった。

9月の施策提案の場には、市長をはじめ副市長、部長クラスが出席する。「市職員でも緊張する場なのに、みんな堂々とプレゼンをしますから、頼もしい限りです」と井関さん。市は、予算要望前に提案内容を最終確認する調整会議を行い、市議会の3月定例会後はその最終決定を若者会議に報告する。「市政に提案をしてくれたことに対して、きちんと結果報告することで、市と若者会議のコミュニケーションがより緊密になると考えています」。

若者会議の提案施策

第1期	富田林遊び尽くせ月間の開催（継続）
	市公式インスタグラム開設（写真投稿キャンペーン開催）（継続）
	ミライ・カフェの設置（継続）
	演劇講座の開催
	ウォールアートの製作
第2期	農業応援プロジェクト（実施に至らず）
	イメージキャラクターを活かした広報活動の強化
	寺内町きらめきロードの開催
	複合型イベントの開催
第3期	2025大阪・関西万博1年前を盛り上げよう 機運醸成プロジェクト
	「成人の日」行事でのイベント企画

1 若者会議の全体会議の様子（令和5年・第3期）。2 令和3年に第1期若者会議始動。3 ミュールプロジェクトのイベント。製作した壁画の脇の壁にみんなでお絵描き。4 市幹部を前に施策提案をプレゼンテーション。5 富田林特産のなすを生かしたイベント"ナスティバル"の検討の様子。6 河野隆太さん（左）は山梨県出身で富田林市と連携協定を結んでいる大阪芸術大学（河南町）在籍。渋川千栄子さん（右）は富田林市出身で、ともに大学3年生（取材時）。現在はOB・OG会ここととんのメンバーとして活動している。



1

2

3

若者会議OB・OG会の活動

1「ふるさと寄附金」として富田林市に寄附いただいた方に対して返礼品に同封するメッセージカードを制作。2 市内の金剛地区においてまちのにぎわい創出とふるさと意識醸成を図るイベント「金剛山バル☆Winter Land2022」に参加。3 各地で活躍するまちづくりに関わる若者との交流として全国まちづくり若者サミットに参加、「若者が育つ地域とは」と題して登壇した。

◉ 若者側から提案した“若者会議 OB・OG 会 心はいつも富田林”

当初富田林市では、若者たちが議論の中から市の課題に気づき、解決のための当事者意識をもってもらうことを第一義とし、事業は市の担当部署が実施するとしていた。しかし、うれしい誤算が起きた。若者会議の任期を終えた若者たちから、引き続きまちづくりに関わりたいという要望が出てきたのである。「自分で企画したものは最後までやり遂げたいと思いました」と河野さんは当時を振り返る。この意向を受け、創設されたのが、「若者会議OB・OG会 心はいつも富田林（愛称：こことん）」である。

最初の仕事は、冒頭で紹介した「ミューラルプロジェクト」。製作では既存の壁を利用したが、ペイント前に市職員とともに壁面を洗浄し、公園の清掃も担当するなどイベントの運営を手伝った。渋川さんは「寺内町きらめきロード」の企画で謎解きイベントの開催を手がけ、具体的な仕掛けやパンフレットなどの仕上げはプロのノウハウを活用するために市が実施する業者選定委員会に参加した。

4

4 若者会議 OB・OG 会のハロウィンイベント「富田林で遊び尽くせ！」にて。

OB・OG会は任意団体で、加入に強制力はない。現在の会員は33名。会員同士での交流会などのほか、市からの依頼も受ける。都市魅力課からはふるさと寄附金のお礼メッセージのカードの制作依頼、地域イベントの支援や自治体間交流事業への参加などの依頼も増え、存在感を増している。「市の会議でも若い人に意見を求めることが多く、興味のある方に出席を打診することもあります」と井関さん。

若者会議の募集には、関心のある学生・生徒に声をかけ、送り込んでくれる教育現場の協力も大きい。市外にある大学とも連携しており、学園都市という地理的要因も優位に働いている。

河野さんは、「市が一緒に若者会議に取り組んでいる雰囲気を感じる」と話す。一方の市職員は、若者に気づかされることも多いという。「みんな、どうやった?」と気軽に問いかけながら、どうしたら若者が市政に興味をもってくれるか、たえず思案している。そこには、若者を見守る大人たちの温かな眼差しがある。その眼差しの中で思う存分力を発揮する若者たちが、やがて次代の若者を導く。行政と若者との間にある信頼とつながりの継続は、富田林市の貴重な財産となっている。

参加し、考え、議論することで、社会が動き、変わることを実感する。そんな若者が育つ若者会議の取り組みに「失敗」はない。たとえうまくいかなくても、それは次の成功のステップなのだから。富田林市では、「次代」が現在進行形で育まれている。

【取材・写真協力　富田林市教育委員会生涯学習部生涯学習課】